BUNKA GAKUEN COSTUME MUSEUM NEWS
衣を通して日本と世界の文化を知る

ふくはくだより

Vol.37
2024.3.1
編集・発行　文化学園服飾博物館

● “スカート男子”っていうけど……1
● 2023年の活動報告……2
● 特　　集……3
● 2024年 展示のご案内……4

“スカート男子”っていうけど、、、

～ 無意識の先入観、ありませんか？ ～

パンツ＝男性のはくもの、スカート＝女性のはくもの、、、さすがにその考えは古い！と皆さんは思うでしょう。でも、そもそもスカートは女性のはくもの、と思っていませんでしたか？　いいえ、民族衣装には、男性がスカートや巻きスカート状の下衣をはく地域も多く、”スカート男子”はあたりまえ。また、男女で下衣の形状が同じところも多いのです。ここでは世界各地のスカート状の下衣を見ていきましょう。そこにはどんなワケが？

ケース 1

山間地や高地

足の動きを妨げることなく、山道などの起伏のある地形を歩くには、丈の短いスカート状の下衣が最適なのです。

ギリシャ南部やバルカン山岳地帯の男性の衣装。

台湾南部の山地に暮らすパイワン族の男性の衣装。

グレートブリテン島北部の山岳地帯に位置するスコットランドの男性の衣装。

ケース 2

暑い地域

暑い地域では、下衣が二股に分かれていないことで、体に熱がこもりにくく体熱を放出しやすくなります。また、下衣の丈が長いことで歩くたびに布を通して風が送られます。

高温多湿な日本の着物も二股に分かれておらず、基本形態は男女で同じ。

ケース 3

暮らし方

それぞれの民族の基層文化や生業も影響します。

モンゴルの人々。馬に乗る習慣があったため、馬にまたがりやすい、やや広がった長いコートを着ています。男女ともに衣服の基本形態は同じ。

＊下衣の内側には、二股の下穿きや下着を着ることもあります。

画像提供：野口文子、村上佳代

ヨーロピアン・モード

３月10日 ～ ５月20日

本展では、18世紀から、産業の発達や社会の成熟とともに変化する19世紀を経て、若者や大衆が流行の担い手となった20世紀末まで、約250年の女性モードの変遷を、その社会背景とともに紹介しました。
第２展示室では「アールヌーヴォーの工芸」を特集しました。流麗な造形のガラス器や装身具、ミュシャの版画とともに、それらの影響を受けた日本の帯留や櫛などを展示しました。来館者からは、世紀末の美術様式と服の流行、日本とのつながりが面白い、などの感想をいただきました。

日本服飾の美

６月17日 ～ ８月６日

本展では、当館所蔵の日本の服飾資料の中から、最も主要な優品、約80点を「宮廷衣装」「小袖」「武家服飾」「能装束」の４つのカテゴリーに分けて紹介しました。それぞれの制度やしきたり、美意識や気風から生み出された服飾には精緻な染織技法や優美な意匠が見られ、来館者にも日本の美意識を堪能していただけたことと思います。着物での来館者や海外からの観光客の姿も見受けられ、また、会期中に行われた当学園の100周年記念式典当日には、多くの方々にお越しいただきました。

文化学園創立100周年記念 日本の洋装化と文化学園のあゆみ

９月16日 ～ 11月13日

本展は文化学園の創立100年を記念し、幕末に始まる日本の洋装化と、日本の服飾教育を牽引してきた文化学園の100年のあゆみを振り返りました。展示では、博物館の資料のみならず、図書館、ファッションリソースセンターなど、文化学園内に所蔵される洋装関係の資料を幅広く紹介し、日本における洋装の歴史と、文化学園が果たしてきた社会的役割を再認識することができました。会期中にはオンライン講演会を開催し、約100名が参加しました。

魔除け ー見えない敵を服でブロック！ー

12月９日 ～ '24２月14日

本展では世界各地の「魔除け」の衣服や装身具に注目し、約40か国の衣装を「魔を遠ざける」「魔の侵入を防ぐ」「魔をまどわせる」「魔除けの赤」「祈りと願い」の５つの章に分けて紹介しました。それぞれの民族が恐れる「魔」には、地域や思想による違いがあると同時に、地域を超えた共通点や工夫もあり、「見えない敵」をいかに恐るべき存在と見ていたか、また身を守るために衣服や装身具にどのような役割を求めたかを、興味深く感じていただけたことと思います。

これまでの展覧会ポスターを掲示しました

文化学園創立100周年にあわせ、２階ロビーで「ポスターでたどる服飾博物館」として、服飾博物館で開催された1986年からの展覧会のポスターを一堂に掲示しました。
来館者からは、「この展示、見た！」「懐かしい」などの声や「服だけを切り口としてこんなにたくさんの展覧会ができるなんて！」といった感想が聞かれました。

ロビー展示「ポスターでたどる服飾博物館」

ギャラリートークを再開しました

６月に開催された「日本服飾の美」展から、ギャラリートークを再開しました。この３年間、コロナ禍で実施を見合わせてきましたが、再開によって展示品の魅力を直接お伝えする貴重な機会が復活しました。

北竜湖資料館が閉館しました

長野県飯山市の北竜湖畔に移築した茅葺の古民家に、日本各地の郷土玩具を展示してきた文化学園北竜湖資料館が閉館となりました。平成元年の開館以来、多くの方にご来館いただきありがとうございました。

北竜湖資料館

図録『日本の洋装化と文化学園のあゆみ』を刊行しました

９月16日から11月13日まで開催された「日本の洋装化と文化学園のあゆみ」展の図録を刊行しました。幕末期から戦後までの日本の洋装化の歴史と、文化学園のあゆみが250カットを超える豊富な写真とともに紹介されます。是非ご覧下さい。

『日本の洋装化と文化学園のあゆみ』
B5判 96ページ ￥1,500

オンライン講演会を開催しました

10月14日に「日本の洋装化と文化学園のあゆみ」展の関連イベントとして、オンライン講演会を開催しました。約100名が参加し、３名の講師がさまざまな時代とテーマ、切り口でお話下さいました。

オンライン講演会　運営の様子

昭憲皇太后の大礼服を3D化

文化学園大学大学院のブリタニー・グラッシーさんが、研究の中で当館所蔵の昭憲皇太后の大礼服の３Dモデルを作製しました。この研究は大礼服が当時どのように着装されていたかを３Dで復元することを試みるもので、「日本の洋装化と文化学園のあゆみ」展の中でも紹介しました。

３D化した大礼服のボディス
© Brittany Glassey

服飾博物館 学芸員がおススメする文学作品、10 選

小説や物語の中には「裁縫」や「針仕事」「服作り」が物語のテーマやエッセンスとなっている作品がいくつかあります。
子供向けの絵本から社会派の小説まで、、、。裁縫や服作りがいつでもどこでも生活の近くにあるということが分かります。
ここでは、それらの中から10作品をランダムに選び、ご紹介します。

『針女（しんみょう）』 有吉佐和子

戦中から戦後にかけて、針で身を立てると決意した孤児清子の18歳から25歳までの愛と葛藤の物語。針仕事で生きていく女性の姿を通して激動の時代を描く。

有吉佐和子
『針女』
新潮文庫 刊

おススメ POINT！

戦中のもんぺ一辺倒の生活から、戦後には輸入されたナイロンの派手なドレスを着用するなど、女性の衣生活が急に移り変わる様子を感じます。また、千人針に女性たちが込めた想い、それを戦場で心の拠り所にしていた男たちの心情も見事に書かれます。

『ミセス・ハリス、パリへいく』 ポール・ギャリコ著／亀山龍樹訳

ロンドンの家政婦・ハリスは、得意先のお屋敷で見たディオールのドレスに一目ぼれ。節約とくじでお金を貯め、ついにパリのディオール本店へ！

ポール・ギャリコ著／亀山龍樹訳
『ミセス・ハリス、パリへ行く』
KADOKAWA／角川文庫 刊

おススメ POINT！

夢を諦めず、明るく誠実に生きるハリスから勇気をもらえます。ファッション好きな小学校高学年向き。いくつになってもオシャレ心を失うことなくステキな服を着たい気持ちにはげしく同意！

『つくろいものや はじめます』 水沢いおり

お江戸の町でつくろいもの屋を開いたのは、元は古い裁縫道具だったあやかし（つくも神）たち。お客さんの着物を繕うだけではなく、問題も解決してくれる。

水沢いおり 作／石橋富士子 絵
『つくろいものやはじめます』
偕成社 刊

おススメ POINT！

あやかしだけど人情に厚く、困っている人をほっておけない３人組が、自慢の裁縫の技術で難問題を解決。ドレスを着たお姫様の話より、日本の昔話が好きなお子様に。江戸の風習も学べます。

『仮　縫』 有吉佐和子

洋裁好きの真面目な学生の隆子が、オートクチュールの世界に足を踏み入れると、華やかな世界の裏には洋裁の世界で頂点を目指す女の闘いが、、、。

有吉佐和子
『仮縫』
集英社文庫 刊

おススメ POINT！

型紙を使わない独特の裁断法、２度の仮縫、顧客とのトーク力など、オートクチュールの技術を目の当たりにして、学校で学ぶ洋裁と仕事としての洋裁との違いに驚くシーンが印象的。隆子の成長には目を見張るものがありますが、野心が強くハラハラします。

『ミシンの見る夢』 ビアンカ・ピッツォルノ著／中山エツコ訳

19世紀末から20世紀初期のイタリアのとある小さな町を舞台に、お針子として身をたてる主人公がさまざまな事情を抱える裕福な家庭に通いながら問題を解決する。

ビアンカ・ピッツォルノ著／中山エツコ訳
『ミシンの見る夢』
河出書房新社 刊

おススメ POINT！

イタリア版「家政婦は見た」的なストーリー !?　当時個人が所有するのは珍しかった手廻しミシンや裁縫の技法名、さまざまな生地やレースの産地が随所にちりばめられ、裁縫好きにはたまらない！

『わたしのワンピース』 にしまきかやこ

1969年の初版以来、ロングセラーを続ける絵本。
うさぎさんの白いワンピースの柄が次々と変わる、ファンタジックなストーリー。

にしまきかやこ／絵と文
『わたしのワンピース』
こぐま社 刊

おススメ POINT！

真っ白なワンピースが、花畑を通ったり雨が降ったりすると、その模様に変わっていくことは、テキスタイル・デザインの発想に通じるのかも。服と自然の一体感は今の時代にふさわしく、何より自分の服がステキになることは楽しい！と思わせてくれます。

『女の勲章』 山崎豊子

昭和20年代後半、ファッション専門学校を立ち上げ、デザイナーとしてファッション業界での成功を目指す主人公、大庭式子と彼女を取り巻く人間関係を描いた物語。

山崎豊子
『女の勲章』
新潮文庫 刊

おススメ POINT！

昭和20-30年代の洋裁ブームの熱狂、パリモードへの憧れがもたらす熱量を感じます。パリのデザイナーが作り出す立体的なシルエットのドレスが日本のファッション界に与えた影響もリアルに描かれます。東京の代表的な洋裁学校として文化服装学院が登場！

『アウシュヴィッツのお針子』 ルーシー・アドリントン著／宇丹貴代実訳

アウシュビッツ強制収容所の中に設けられた、支配者たちのための服の仕立てを行う作業場。ここで労働を強制されたユダヤ人のお針子の女性たちの実録。

ルーシー・アドリントン著／宇丹貴代実訳
『アウシュヴィッツのお針子』
河出書房新社 刊

おススメ POINT！

ドキュメンタリー映画を読む感覚。ナチスの非道な行為には胸が痛みます。ヨーロッパの染織産業とユダヤ人の関わりについての記述は興味深く、また当然ながら「服」は単なる着るものではなく、社会や人々の立場を象徴するものであることを痛感します。

『ジンジャー・ツリー　一愛と追憶の日本』 オズワルド・ワインド著／小野寺健訳

日露戦争の頃、北京で出会った日本軍人と道ならぬ恋に落ちたスコットランド女性。日本で暮らし、ドレスメーカーとして自立、異国でたくましく生きる女性の物語。

オズワルド・ワインド著／小野寺健訳
『ジンジャーツリー』
河出書房新社 刊

おススメ POINT！

百貨店の婦人服部に雇われた主人公が、コルセット部門を開設したり、調節可能なイギリス製トルソーを使用したりと、フィクションながらも明治末期の日本の洋装化を感じることができます。1913年生まれの著者は18歳までを日本で過ごしたそうです。

『バルザックと小さな中国のお針子』 ダイ・シージェ著／新島進訳

文化大革命の嵐が吹き荒れる中国。「再教育」のために寒村に送られた青年達と、村の仕立屋の娘との物語。密かに持ち込んだ仏小説が少女の意識に変化をもたらし、、、。

ダイ・シージェ著／新島進訳
『バルザックと小さな中国のお針子』
早川書房 刊

おススメ POINT！

服作りが得意で魅力的な仕立屋の娘「小裁縫」は、村の中では一目置かれる存在として描かれています。「濃い灰色の襟がついたマリンブルーの上着」や「コール天でできた深緑の上着」といった、物語に登場する人物の細やかな服飾表現にも注目。

＊この特集記事の内容は個人の感想であり、服飾博物館の公式な見解ではありません。

2024年 展示のご案内 ● Exhibition Schedule

3月11日(月)～6月22日(土)
“オモシロイフク”大図鑑

＊5/26、6/16は開館
4/19、6/7は19:00まで開館

世界には私たちがまだ見たこともない、想像を超えるような驚くべき衣服がたくさんあります。それらはそれぞれの国や地域で、気候への適応や外敵からの防御など、生命の維持につながる何らかの意味を持ったり、それぞれの文化で培われた思想に基づいたものでもあります。本展ではさまざまな地域の衣服や付属品などを、「ながい」「おおきい」「まるい」「たかい」などの特徴に分けて紹介します。同時に、フォルムの持つ面白さばかりではなく、どうしてそのような形状になったのか、それぞれの形の持つ意味も探ります。約30か国のバラエティーあふれる衣服からは、思いもよらない発想や驚きの知恵など、私たちの固定観念を超えた多様な衣服造形を感じていただけることでしょう。

【ながい】
パンツ
パキスタン 1980年代

【たかい】
頭飾り
シリア
19世紀末-20世紀初め

【まるい】
スカート：ガガラ
インド 19世紀後半

【おおきい】
ドレス
アメリカ？
1863-65年頃

【おもい】
鎖帷子
日本　江戸時代後期

【たかい】
高底靴：ガオディシェ
中国
19世紀末-20世紀初め

7月19日(金)～11月4日(月)
世界のビーズ

＊7/28、8/25、11/3、4は開館
夏期休館＝8/9～18
8/30、10/25は19:00まで開館

衣服や装身具に幅広く用いられるビーズ。その素材は、木や石など入手がたやすいものから、宝石のような貴重な鉱物、ガラスやプラスチックといった合成素材など、地域や時代によってもさまざまです。ビーズで身を装うことは単なる装飾にとどまらず、民族や社会的立場といったアイデンティティーを表したり、富や権力を象徴することもあります。また、連なる玉に祈りを込める数珠など、精神世界とつながるための役割を果たすこともあります。本展では、交易品として珍重されたガラス・ビーズ「とんぼ玉」、ヨーロッパのきらびやかなビーズ刺繍のドレス、象徴的な意味を持つアジアやアフリカの各民族の衣服や装身具など、約40か国のビーズを紹介します。

王冠：アデ
ナイジェリア
1960-70年代

頭飾り：ティリャ・コシュ
ウズベキスタン　20世紀初め

女性用衣装
ポーランド　1982年頃

バッグ
ヨーロッパ
1910年代

女性用衣装
アフガニスタン
1970-80年代

上　衣
フィリピン
20世紀前半

12月5日(木)～2025年3月5日(水)
あつまれ！ どうぶつの模様

＊年末年始休館＝12/27～1/5
12/20、2/14は19:00まで開館

鳥や獣などの動物をモチーフとした模様を衣服に取り入れることは、さまざまな地域で見られます。それらの動物の模様からは、それぞれの民族がどのような動物を目にし、どのように暮らしを営んでいるのかが垣間見えます。また、空を自由に飛ぶ鳥、牙を持つ勇猛な獣など、人にはない優れた能力が備わる動物に畏敬の念や神秘性を感じ、自らの願いを託して模様に取り入れることもあります。さらに、人間の願望や創造力が現実を超越した架空の動物を作り出し、縁起の良い存在として服の上に表すこともあります。本展では、世界各地の衣服に表される動物の模様を集め、それらの持つ意味を探り、遠ざかりつつある人間と動物の本来あるべき関係を改めて考えます。

【鶴】
打 掛　日本　大正15年

【尾長猿】
裂　12-14世紀　ペルー

【山椒魚】
護 符
モロッコ　20世紀中頃

【神話の動物：シホー】
肩 掛（部分）
1970-80年代　ラオス

【水牛と人】
掛 布（部分）
インドネシア
スラウェシ島
20世紀

【爬虫類風のプリント】
ドレス
アレキサンダー・
マックイーン
2009年

上記予定は都合により変更される場合があります。最新の情報はホームページでご確認下さい。

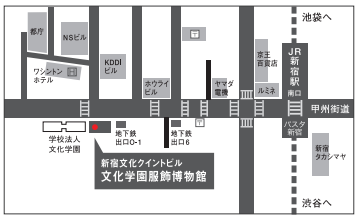
利用案内

◆開館時間　10:00～16:30
(各展示会期中２回、19:00まで開館 入館は閉館の30分前まで)

◆休 館 日　日曜日、祝日、夏期・年末年始、展示替の期間

◆入 館 料　一般 500円・大高生 300円・小中生 200円
＊20名以上の団体は100円引、障がい者とその付添者１名は無料

◆交　　通　JR/京王線/小田急線 新宿駅(南口)より徒歩７分
都営地下鉄 新宿線/大江戸線 新宿駅(新都心口)より徒歩４分



文化学園服飾博物館
〒151-8529 東京都渋谷区代々木 3-22-7
TEL. 03-3299-2387
https://museum.bunka.ac.jp

学校法人 文化学園
文化学園大学/文化ファッション大学院大学/文化服装学院/
文化外国語専門学校/文化出版局/文化学園服飾博物館